

動物福祉に配慮したオカピの削蹄方法の一例

○正木美舟

(横浜市立金沢動物園)

近年、動物の飼育において、動物福祉に配慮した対応がますます求められてきている。金沢動物園では、1997年に初来日したオカピ（オス、1996年5月7日生まれ）を飼育しており、2021年に日本最高齢の25歳となった。後々の削蹄の必要性を考慮し、16歳の2013年9月から漠然と前肢の球節まで触れる馴致を開始していたが、2017年には蹄の伸長や変形が見られるようになったため、2018年12月25日より削蹄を目的とした馴致を本格的に開始した。麻酔や保定をせず、動物福祉に配慮したその削蹄方法を一例として報告する。

2018年以降の馴致段階として「人が複数人いる環境への馴致」、「体や肢に触る」、「肢上げ」を主な目標とした。複数の人への馴致は、通常職員1人が対象個体と同室に入るが、2人以上はまれであり、削蹄時は削蹄する者と強化子（木の葉）を持つ者と最低でも2人必要となるためである。

人員は最低でも2人以上で基本的に毎日実施し、馴致時間は約10分～20分を目安とし、個体の集中力次第とした。場所は個体の展示状況に応じて、展示場、サブパドック、寝室で行った。

当初は前肢を触ることに対して嫌悪は示さず、後肢の飛節や球節を触れることにはやや抵抗感を示し、蹴りあげることもあったが、約1週間で慣れ、馴致開始から8日目には前肢を持ち上げ1分程度保持、後肢は飛節・球節まで触れるようになった。21日目には前後肢共に肢上げ保持からのブラシ掛けが可能となり、26日目に前肢、36日目に後肢に鑢（やすり）での削蹄と剪定鋏での切断が可能になった。

2020年6月以降は座り込むことが増え、その際に近づき、体に触れ、削蹄する馴致を開始した。伏臥状態の維持は個体の意志によるため、削蹄可能時間はまちまちだが、肢を上げて片手で保持する必要がないため、両手を使って力を込めて切断することも、長時間削蹄することも可能となった。また、起立状態で脇から蹄に触れ、肢を上げない状態での蹄尖の削蹄も可能となった。高齢により今後ますます麻酔の危険性が高まるため、この方法での削蹄を継続し長寿命化につなげたい。